

編集後記

『藤女子大学国文学雑誌』がついに二〇〇号を迎えた。本学科の前身である国文学科のスタートは本学開学・文学部開設と同じ一九六一年であり、本誌が創刊されたのは、それから七年目の一九六七年のことである。爾来五十二年間、時代も昭和、平成を経て、今号が世に出る頃は令和の世となっているのだろう。私事ながら、一九九二年に藤女子短期大学国文科に着任した翌年に本誌は五〇号の記念の節目を迎えたのだった。その時に学科全教員執筆による特集号が刊行されたのに倣い、今号も全員執筆号として編むこととなり（実は一名の不届き者がいるが）、九篇の論考を収載する充実した構成となった。

本誌が五〇号を迎えた頃は、まだ学科名も国文学科であり、短大も併設されており、大学の方は五十名から八十名への定員増が行われ、短大も百人定員であった。当時は例えば、「シラパス」も「オーブンキャンパス」も「出張講義」も、「オフィスアワー」「自己点検評価」なぞという特別なことばや、「〇〇ポリシー」だとか「FD」やら「GPA」なるものともまだ無縁でいられたし、授業や入試や会議等の実施回数も今ほど厳密であったり何度も行われたりすることなどない、のどかなよき時代の最後期であった。本学に限ることではないが、その後の大学（とりわけ文学部、とりわけ日本文学科のたぐい）を取り巻く状況は激変を重ね、いち

だんと厳しさを増し、今日に至っている。授業・研究以外の諸業務もいや増していくなかにおいて、やはり我々のなすべき根本は、学生に対するしつかりとした教育と、その基盤たる研究の持続であることをこの節目にあたりあらためて肝に銘じつつ、記念号の後記としたい。（K）

二〇一九年三月二十五日 印刷
二〇一九年三月三十日 発行

藤女子大学 国文学雑誌（第99・100合併号）

振替 〇二七〇〇一四一六八〇七番
定価 五〇〇円 送料八〇円

編集人 揚 妻 祐 樹
発行人

発行所 札幌市北区北六条西一丁目
藤女子大学 日本語・日本文学科学研究室内

藤女子大学 日本語・日本文学

印刷所 札幌市中央区北六条西五丁目

(株)491ラヴァン札幌